椙山女学園大学研究論集　第29号（人文科学篇）1998

オーラル・ヒストリー（口述史）のすすめ

―研究・教育手法としての一考察―

山　本　恵里子

Oral History as an Active Approach to Research and Teaching

Eriko YAMAMOTO

はじめに

Oral History という新しい歴史研究の手法は，第二次世界大戦後広がり，アメリカでは既に4世代目の研究者が活躍しているといわれる[1]。　口頭インタビューという形で録音された個人の述懐を歴史的資料とみなすことには，抵抗や批判もあったが，現在では歴史学・アメリカ研究・女性学・民族研究など，多くの分野に広く浸透し不可欠の研究方法であると同時に，教育の場において，学習体験を活性化する手法として取り入れられている。その他の国々にも浸透し，オーラル・ヒストリーを学問分野として確立する動きは，1970年代ごろには「世界的に」なったといわれる[2]。

一方，日本では，「口述史」「聞き書き」「生活史」などという名称で，インタビューを用いた研究は多いが，興味深い体験を持つ人がいたので話を聞いて研究としたという，被験者先行の結果であるように思われる。すなわち，オーラル・ヒストリー自体が方法論的分野としては意識されることなく，単発的・偶発的に使用されてきたのではないだろうか。また，インタビューをとおした調査は，社会学などの分野でも広く行なわれているが，歴史のアプローチとしてのオーラル・ヒストリー・インタビューの意義・定義は，特に議論されていない。

オープンリールのテープレコーダーさえ珍しかった時代ははるか昔になり，いまやカセットレコーダーどころか，ミニディスクレコーダーやビデオカメラといった電化製品さえも庶民の生活の一部になっている。このようなオーディオ・ヴィジュアル技術の進歩と製品の普及により，オーラル・ヒストリーをやろうと思えば，だれでもが高品質の録音（そして録画さえ）できるのである。これを学問的な方法論として，その基準や手順を検討した上で，積極的に歴史研究に取り入れていことが是非必要であろう。同時にまた，文字離れしたといわれる現代の学生にとって，このようなオーディオ機器を使った手法は，歴史への関心を高め，身近なところから主体的に学ばせる方法として，教育面での利用価値も高い。本稿は，アメリカでのオーラル・ヒストリーを中心に紹介しながら，日本での効用も考えてみたい。

I．オーラル・ヒストリーの発展と日本での現状

人間は過去の出来事や物語を後世に伝えてきたが，文字を持たない人々の間では，口頭伝承が情報の記録・伝達方法であった。その音声自体が保存されるのではなく，口から口へと受け継がれてきた。例えばアメリカ先住民や，奴隷として文字を持ちえなかったアフリカ系アメリカ人などもそうであった。同時に，文字を持った人々の中でも，歴史を書き留める者はほんの一握りに限られる。家族史の一頁であるにしろ，重大な歴史的事件や時代にしろ，それを体験した者の証言は，その死と共にほどんど消え去っていく場合が多いであろう。史料とは文字によるもので，歴史は学識者が重要として文字で記録したものだと認識されていれば，一般庶民の体験談など価値のない情報として消えてゆく運命となる。

しかし，民主主義の拡大とオーディオ技術の進歩は，録音インタビューを研究手法とする動きにつながった。人々とのインタビューや過去の話を歴史的証言として収集し，歴史研究の一手法として確立しようとの動きがでてきたのは，第二次世界大戦後のアメリカにおいてである。そのルーツは 1930 年代，ニューディール政策の時代の，ローレンス・レディックによる黒人史のプロジェクト等にあるといわれるが，全米で最初のオーラル・ヒストリー研究所が設けられたのは 1948 年のことであった[3]。アラン・ネヴィンズ，ルイス・スターらが創始者となり，この新しい歴史の手法はコロンビア大学にて本格的な学問となった[4]。特にネヴィンズは，オーラル・ヒストリーの創始者とみなされている。彼は，政治家などの著名人でさえ，自伝や回顧録を書く人は多くないが，口頭でなら話してくれることに目をつけ，そのような談話による歴史の情報をなんとか保存したいと感じていた。そんなとき，テープ・レコーダーの出現は，速記や談話メモの限界を打ち破る活気的な出来事であった。彼らは例えば太平洋戦争後の日本にきたアメリカ兵にインタビューし，占領時代の日本・日米関係を記録した。この研究所では種々のテーマでプロジェクトを行い，そのインタビューは航空史，映画史，医学・公衆衛生史，教育史などに及ぶ[5]。

個人の回想録や思い出話し，聞き伝えをアカデミックな歴史資料と見なすことへの批判もあった。口承伝統を記録しようとする民俗学的な方法に対し，ホーマー・C・ホケット，アレン・ジョンソン，ロバート・H・ロウイーなどが手厳しい批判を下した。文字になっておらず，正確さにも信頼がおけないとして，たとえばアメリカ先住民の伝説は無価値とされた[6]。しかし，多少の不正確さ，主観性や修正が入っている可能性を否定できないにしても，だからといってその情報がすべて虚偽で無価値だとする必要はない。たとえ文字になっている資料でさえ，その正確さ，真実性などを確証する必要があり，それが歴史研究者の役目でもある。オーラル・ヒストリアンとよばれる研究者たちは，インタビューであつめられた情報を検証し，またいかにしてよりよいインタビューを行うかなどを議論し，オーラル・ヒストリーの学問的地位を向上してきた。公民権運動に揺れた 1960 年代のアメリカで，オーラル・ヒストリーは飛躍的に広まった[7]。Oral History Association（全米オーラル・ヒストリー学会）は，UCLA のジェームス V. ミンクの主導のもと，1967 年に設立され，論集 The Oral History Review やニューズレターを発行し活動を続けている[8]。OHA は，アメリカ合衆国においては 1,100 人以上の全国的組織として活躍しているが，この他にも州や地域レベルのものが少なくとも 11 ある[9]。

その成長ぶりは，オーラル・ヒストリー・プロジェクトの増加に表れた。大学の研究所や図書館の他，地方自治体なども加わり，数が増加していった。それとともに，オーラル・ヒストリーに関する論文は60年代中ごろから急激に増加した。大学の研究所・図書館等が企画し，プロジェクトとしてインタビューを収集・保存したものが，コロンビア大学の他にも多々ある。カリフォルニア大学ロサンジェルス校のJapanese American Research Projectとして行われた日系人へのインタビュー，カリフォルニア州立大学フラトン校のハンセン教授が中心となって行ったものがある。ハワイの移民労働者たちのインタビューを収集したハワイ大学のOral History Projectは，プランテーション生活史や労働運動を記録する重要な生の資料となっている。

インタビューを単なるトランスクリプトとして文字にしただけの出版物もあるが，それを資料として使い，歴史研究の一端となるような著作も多く出されるようになった。*The Oral History Review* の論文・書評だけからでも，いかに多様なテーマで，オーラル・ヒストリーを用いた研究がなされてているかが判る。

一般的な本も多くでている。先ほど述べたマイノリティ研究の中で見てみると，たとえばアフリカ系アメリカ人に関しては，James P. Comer, *Maggie's American Dream : The Life and Times of a Black Family* (New York : New American Library, 1988) があげられる。筆者が母のオーラル・ヒストリーを使い，家族の歴史をまとめたものである。移民史としては，Al Santoli, *New Americans : An Oral History* (New York : Viking, 1988) が，様々な国からの最近の移民・難民の話をまとめている。アジア系アメリカ人全般を扱ったものでは，Joann Faung Jean Lee, *Asian Americans : Oral Histories of First to Fourth Generation Americans from China, the Philippines, Japan, India, the Pacific Islands, Vietnam and Cambodia* (New York : The New Press, 1991) があげられる。日系人のみに関しては，代表的なものには，特定の日系人コミュニティを対象としたLinda Tamura, *The Hood River Issei: An Oral History of Japanese Settlers in Oregon's Hood River Valley* (Urbana : University of Illinois Press, 1993) がある。インタビューを基盤に，他の資料も用いながら，移民前の日本での生活から，アメリカ社会への適応，戦時中の体験などを生々しく再現したものである。Mary Paik Lee, *Quiet Odyssey : A Pioneer Korean Woman In America* (Seattle : University of Washington Press, 1990) は，韓国系移民女性リーの体験をスーチェン・チャンが文字にして編集したものである。またベトナム系アメリカ人史では，14人のインタビューに基いて書かれたJames M. Freeman, *Hearts of Sorrow : Vietnamese-American Lives* (Stanford : Stanford University Press, 1989) がある。

女性に関してで特筆すべきものに，3世代に渡る女性医師たちの体験を綴った，Regina Markell Morantz, Cynthia Stodola Pomerleau, and Carol Hansen Fenichel, eds., *In Her Own Words : Oral Histories of Women Doctors* (New Haven : Yale University Press, 1982) がある。女性が医学の道を志すのさえ珍しかった時代から，1950年代生れのアフリカ系アメリカ人女性が医者になれる現代までの歴史的変遷が，9人の女性医師のオーラル・ヒストリーを通して，見事に描き出されている。海外から日本を見たものもある。Haruko Taya Cooke and Theodore Cook, *Japan At War : An Oral History* (New York : The New Press, 1996) がその例である。

一方我が国でも，やはり戦後史でオーラル・ヒストリーがみられる。GHQ に関して，竹前栄治著「GHQ 労働課の人と政策―担当者への直撃インタビュー」(エムティ出版) は，「政治文書の行間を埋めるもうひとつの占領史」として GHQ 労働担当官の証言をまとめたものである。労働運動に関して，河西宏祐編「戦後史とライフヒストリー―千葉大学教養部の教育実践記録」(日本評論社　1992) がある。大学の講義の中で，戦後史の証人から証言を聞く，とい形でライフヒストリーを集め，それを本にまとめたもので，オーラル・ヒストリーの教育効果についても考えさせられる本である。

御茶の水書房から叢書ライフ・ヒストリーがでているが，その中でも，ブラジルへの日系移民の話を著した前山隆「非相続者の精神史―或る日系ブラジル人の遍歴―」(1981)，中野卓編「口述の生活史―或る女の愛と呪いの日本近代―」(1977) が代表的である。カナダの日系二世の女性の口述史をまとめたものとして，村井忠政「ある日系カナダ人女性の生活史」が挙げられる[10]。(歴史的視点はないが，インタビューを集めたものでは，江崎泰子・森口秀志編「『在日』外国人」(晶文社　1988) が，日本の多文化の側面を考えさせるものとして興味深い。)

数は多くないが，日本においてもこのような研究が行われてきたことは，オーラル・ヒストリーが実質的に活用されていることを示すものであり，これから一層有効な方法論として認められ広まっていく可能性を示唆している。インタビュー自体は，世俗的なマスコミなどのレベルでは日常茶飯事行われているといってよいが，それを歴史研究者たちがより正確でアカデミックなレベルに高めていくことが必要であるし，大学教育の場で取り入れれば学生の関心を高め，かつ授業の活性化・学生の主体性にも好影響を及ぼすのではないだろうか。

第二次世界大戦以降の社会変動，民主化，そして電化製品の普及を思えば，この現象は不思議ではない。テープ・レコーダーの普及とともに，オーラル・ヒストリーは身近な研究手法となり，いまや歴史学の範囲を越え，他の分野―特に学際的で比較的新しい分野―にて広く用いられている。前にも述べたが，インタビューを使用する学問は多いが，オーラル・ヒストリーの特徴は，被面接者を「歴史の生き証人」としてとらえ，その生の声・情報を収録しようとする点であろう。選んだテーマに関し，被面接者の体験を史実の一データとして聞き出し，保存し，研究者が使えるようにする。その後アメリカの幾つもの大学が，オーラル・ヒストリーのプロジェクトに取り組み，幅広いテーマで組織的にインタビューを行ったものがあるが，文字におこしたりテープのままで研究用に公開している。

さて，これは他の学問分野とどう異なるのであろうか。コロンビア大学といえば，日本人捕虜にインタビューをし「菊と刀」を書いたルース・ベネディクトや，サモアの研究で有名なマーガレット・ミードといった文化人類学者が思い起こされるが，ダナウェイによれば，文化人類学―特にその中でも ethnography (民族誌学) ―のインタビューは特定の社会・文化の形態を調べる目的でその構成員である個人の世界観などを探ろうとする点で，基本的に異なる[11]。アメリカ先住民の口承伝統を収録したことで，文化人類学の貢献は大きいといえるが，オーラル・ヒストリーにより重なる部分の多いのは folklore（民俗学）であり，民俗学者も民衆の「話」を収集したのである。ただし，民俗学では話の「正確さ」にそれほど重きがおかれていないため，life histroy より life story に近くなるといわれる。

社会学でも，人類学と同じように，個人はグループの構成員・その文化の代表者として扱

われる傾向がある。インタビューやライフ・ヒストリーの収集は，社会学のアプローチとしていまや常套手段といえるが，基本的な目的がオーラル・ヒストリーと異なる。しかし，コミュニティの研究においては，オーラル・ヒストリーとの垣根が低くなっているとのことで，特定コミュニティがどのような歴史をもち発展したかを調べるには，オーラル・ヒストリー的な情報収集が必要となるからであろう。

いわゆる学際的分野（interdisciplinary/multidisciplinary fields）においては，オーラル・ヒストリーはほぼそのままの形で受け入れら，大きな位置を占めるようになったといってよいであろう。アメリカ研究や民族研究，女性研究などの分野ではマイノリティの歴史を再構築し，記録する術を持たなかった民衆史のストーリーを掘り起こすための手段として，インタビューで情報収集して，オーラル・レコード（口頭による記録資料）を蓄積するのは重要なことであった。これにより，正統派の白人男性中心の歴史では書かれなかった女性史や移民史が大きく進歩し，単に卑近なレベルのみではなく，学問的研究にも寄与する点が大きかった。その役割は広がる一方である。

II. インタビューの手順

では次に，実際どのようにオーラル・ヒストリーのインタビューを行うかをみていきたい。ある日突然面接者（interviewer）が被面接者（interviewee）に話を聞き録音する，という単発的なものではなく，そこまでのプロセスも重要である。「オーラル・ヒストリー」のインタビューを，単なる録音された雑談・対話ではなく，音声による歴史資料とするには，計画性をもち，形式をふまえて，正当性のある情報を得るよう努めなければならない。OHAのガイドラインなどにより，基本的な概念や手順は一定のものがあって，多くのオーラル・ヒストリー研究所等が各自でまとめたマニュアルも，基本はほぼ同じといえる。ここでは，おもにハワイ大学オーラル・ヒストリー・プロジェクトのマニュアルを参考にしながら，まずインタビューに至るまでの主なステップと要点を簡単にまとめてみたい。

A. 研究目的の設定

オーラル・ヒストリーでは，研究目的と対象を明確にするのがまず重要である。何のために誰をインタビューするのか，誰をインタビューし何を聞こうとするのか，という問いに明確な答えをだしてから始めなければならない。大きな研究プロジェクトになると，立案・計画をする者と，インタビューを行う者が必ずしも同一である必要はなく，計画責任者が適当とみなした人物にインタビュアーになってもらう場合もある。それだけに，研究目的を明確にし，他人にインタビューを委任しても，目的にかなう結果が収録されるようにしなければならない。

ハワイ大学オーラル・ヒストリー・プロジェクトの手引書では，目的に合わせ，次の4つの形態を挙げている。

(1) ライフ・ヒストリー

特に家系史を調べる時などに有効な手段として，特定の人物から，その人の生活史・伝記的情報をできるだけ多く集める。

(2) 特定のトピックに関するインタビュー
もっと限定されたインタビューのやり方として，一定のトピックに関して何人かの人にその記憶を語ってもらい，情報や解釈を求める。

(3) 史実に関してのインタビュー
重大な歴史的事件から，小規模な出来事まで，調べようとする題材に関して，当事者または傍観者だった人々にインタビューし，情報を収集する。

(4) 特定のコミュニティや組織・団体に関してのインタビュー
特定地域の歴史を書き残すために，そこに住んだり働いた経験のある人々にインタビューする。またその中の学校・企業などの組織や，グループなどに焦点をあてることもある[12]。

このように形態は様々であるが，究極的には，文書として残っていない歴史的情報を集め，それを後世に伝えることを可能にものである。計画の段階で研究目的を明確にすることにより，的を得たインタビュー内容にできるであろう。

B. 下調べ・資料の収集

研究目的が設定されたら，研究者はその研究題目に関して，出来る限りの資料・情報を集め，背景的史実などに精通しておく。歴史の再構築を，被面接者の情報のみに頼ると，主観がはいったり，記憶のうすれまたは誤りさえありうるので，出来るだけ正確を期すためにも客観的な資料や情報を収集しておく必要がある。また，一次資料もあれば，前もって目をとおしておくと，具体的な人物や場所の名前，年代などが頭にはいり，インタビューの際に質問を具体化するのに役立つので，可能な限り探しておく。例えば特定地域の歴史であれば，扱おうとする時代の主な出来事を，本・雑誌・新聞などの文献をもとに調べる。家系史であれば，手紙・日記・アルバムなどの資料も貴重な情報源になる[13]。このような資料をみることにより，被面接者から何を聞き出したいかが，よりはっきりしてくるし，また被面接者がどのような時代に生き，どのような影響を受けたかを推測することができる。後述するが，被面接者の情報と合わせ，対比年表を作成する。

C. 被面接者 (interviewee) の選定と承諾

研究目的のためには誰をインタビューすべきかが，重要な問題となる。研究テーマによっては，インタビューの対象者を見つけるのに時間がかかるかもしれない。家系史のために身内にインタビューするのであれば，候補者も見つけ易いし同意を得られる可能性も高い。しかし研究テーマにより，これまで全く面識のない人にインタビューを申し入れるのであれば，人選と承諾で困難も予想される。研究課題に適当であると思われる人々を，第三者の紹介や，組織・団体等 (例えば学校や老人ホーム) を通して推薦してもらう場合は，ある程度のチェックをし，候補者を選定する。そのような判断の際にも，研究目的を明確にしておくことが大切となる。また予備調査は，より内容の濃い録音インタビューができるための準備である。

面識のない人へのインタビューを申し入れる場合は，単に研究目的を達成させるだけではなく，人間関係への配慮も必要になる。他の研究者のインタビューを何度も受け慣れた人

で，すらすらとまとまった話をしてくれる場合もあれば，一度もそのような経験がなく気恥ずかしいといって，史的研究の情報源として貴重な体験をしている人がインタビューを固辞する場合がある。後者の場合は研究課題を理解してもらい，またその人のオーラル・ヒストリーの価値を納得してもらった上で，インタビューの承諾を得たいものである。また，インタビュー後もそれが報われたと感じてもらうよう配慮するのが望ましいであろう。

D. 打合せインタビュー

インタビューの対象が決まったら，本番の前に「プレリミナリー・インタビュー」(予備面談) を行うのが望ましい。これは録音せず，打合せ・下準備のための簡単なものであるが，本番の録音インタビューを質の高いものにするのに役立つ。インタビューをする側にとってもされる側にとっても，本番で初めて会った人に急に様々なことを話し合うような気持ちになるというのは，確かに困難だと予測される。まず一度実際に会って話してみると，緊張をほぐすというだけでも計り知れない効果があるだろう。その他，インタビュアーにとっては，基本的な情報を得，被面談者の話す速度や性格などもある程度把握でき，本番の際考慮に入れることができる。

面識のない人をインタビューする場合，まず電話にて自己紹介をし，研究の趣旨を簡単に説明してから，その人の体験に関して何を尋ねたいか，研究にどう貢献するかを述べてインタビューを承諾してもらい，まず一度お会いしたいといって予約を取る。予備面談は簡単なもので，録音をせず，基本的な情報収集と面識を作っておくためのものといえるであろう。これをもとに，その次の段階では，本番のインタビューの際に尋ねたい事項・質問をリストにする。留意したいのは，被面談者が饒舌な場合でも，「今度伺いたいのは……に関してなのです。随分昔のことですので，詳細を思い起こしながら，ちょっと考えておいていただけないでしょうか。」とこちらの意向を伝え，本番の録音インタビューで話してもらようにする。

しかしながら，被面接者が (多忙・健康状態などの理由から) 時間を限っている場合や，距離的な理由から，当日しか会えない場合，また極度に恥ずかしがっていて，本番だけようやく承諾してくれた場合などでは，予備面談は困難である。どうしても予備面談なしで，本番のインタビューに臨まなければならないときは，事前に電話・手紙などで情報を得ながら個人情報ファイルを作成し，その上で，被面接者研究の意図や内容・主な質問事項を書いたものを郵送しておくと忘れかけていた当時の記憶を思い出しておいてくれたり，うろ覚えだったことを調べて確認してくれている人もいるであろう。また単に，話をまとめておいてくれるだけでも，限られた時間で，より濃密なインタビューができる。

E. 個人情報ファイルと対比年表の作成

基本的な情報を集めた上で，被面接者の歴史的位置づけを行う。氏名・年令・生年月日・出生地・家族背景・教育・職歴など基本的情報は，ファイルにしてまとめておく。(Data Sheet とも呼ばれ，大きなプロジェクトでは，書式を作り，必要事項が記入されるようにしておく。) そして打合せインタビューをふまえて，被面接者一人一人につき，その人の生い立ちと，歴史的事件・流れを並列した表をつくり，その人の歴史的位置付けを行う。後にインタビューの場で，より具体的で的確な質問をする助けとなる。(ハワイ大学では，この年

表を Personal Life Line と呼んでいる。）歴史の一部としての個人史であるとの観点からも，これは是非作成するべきであろう。左半分に関連するような歴史的事項，右半分に被面接者の生い立ちを年代順に列挙する。

F. 録音インタビューの設定

本番のインタビューの日時・場所を設定する。場所としては，一般的には被面接者の自宅が勧められている。本人が一番リラックスして話せる環境だから，というのが主たる理由である。しかし，日本の住宅事情や，初対面の人は余り自宅に招き入れない慣習を考えると，録音環境が整っていれば，別の場所でも構わないであろう。満たすべき条件としては，被面接者が思ったことを心おきなく話せる環境である（周囲の人に気を配らなくてもよい）こと，雑音が入らなくて録音に適した環境であること，途中で邪魔が入らないこと，などである。被面接者の自宅でやらせていただけると，当時の写真や文書などを見せてくれたり，インタビュー以外の資料を提供してもらえることもあり得る。*Oral History Review* の論文で，"I Learned Things Today That I Never Knew Before" というものがある。この筆者はフランス系アメリカ人の民族史（特に女性）の研究に，数人をインタビューしたのだが，フランス系の家族にとって「活力と行動と親睦の中心的焦点」である，ダイニングテーブルにて行ったという[14]。日本の古い家では，縁側などにあたるかもしれない。被面接者が気兼ねなく話せる場を選びたい。

時間としては最低 1 時間から 2 時間程度をとってもらう。午後の方がよりよいと聞いたことがあるが，被面接者の都合と要望にあわせるのがまず第一であろう。本人が一番調子がよく，話しやすい時間帯で，疲れてしまわない程度の長さでおこなう。年配の方や病弱な方にインタビューする場合は，特に配慮が必要である。

G. 録音機器の準備

冒頭にも述べたように，近年オーディオ機器の発達は目覚しい。オープンリールの大きな録音機をかかえ，テープを裏返すのさえ一苦労だった時代を思えば，現在のごく手頃な価格のカセットプレーヤーでさえ，オーラル・ヒストリーの収録に十分な性能であるのは喜ばしい。が，折角の貴重なインタビューが，家に帰って再生してみたら手違いで録音されていなかったとか，ほとんど聞き取れない状態だったという人為ミスもある得る。そのような万一の失敗をさけるため，録音機器と録音環境を周到にチェックする必要は今日でも同様である。主な確認項目は次のとおりである。

(1) テープレコーダー

ほとんどの研究者は，カセットテープレコーダーを使用すると想像されるが，信頼のおけるメーカーの製品で正常に機能しているものなら，大体十分である。サイズとしては，被面接者に威圧感を与えないため，あまり大きなものや，すぐ目の前に置かなければ音が入らないといったタイプは避けるほうがよいといわれる。小型から中型カセットテープレコーダーで，面接者の側から，録音状態の確認テープを裏返すのが容易にできる位置において尚且つ被面接者の声が明確に録音されるものが必要である。マイクロサイズのものは，テープの耐用性や機能に関しての信頼度が低いためか，単なる普及度の

低さからか，極力避けられる傾向にある。

(2) マイク

最近の録音機器は，マイク内蔵でもよい録音ができるものが多い。が必要に応じ，（あるいは手元に持っている場合は，）使用するのが望ましい。少しでもよい録音ができるためである。もう一つの理由としては，テープレコーダーを自分の手元において操作するには，マイクがあると便利である使用する機器や状況に応じた判断が求められる。

(3) テープの種類

基本的には，信頼のおけるメーカーの高品質のものを使用するのが鉄則である。現在日本では，高品質のブランド物の録音用テープでさえ実に安くなっており，粗悪品はあまり見当たらないので，それほど注意する必要はないように思われる。が，万一外国でインタビューし，テープを現地で購入する必要がでた場合などには，留意すべきであろう。良質なものでないと，音質・テープの走行に問題がでる可能性があり，貴重なインタビューを保存・再生できないという事態を引き起こしかねない。

以前は，60 分テープが最適といわれた。90 分以上では，テープがうすくて保存に向かないし，45 分とかでは短か過ぎて，頻繁にテープを裏返す必要があるので不適だとのことだった。現在では長めのテープも強度が増したとのことだが，90 分までにしておくほうがよいといわれる。

(4) その他の機器の使用

8 ミリビデオカメラの普及した現在では，被面談者の表情も映像として残せるので，これをオーラル・ヒストリーに使用しても構わないとの見解が一般的のようである。しかし，録音のみとことなり，カメラアングルの設定などに気をとられすぎると，肝心の話を聞くのにマイナスになり得る。飽く迄も主要な目的は，被面談者から歴史的叙述をしてもらい，その情報を資料として保存することである。が，家族にインタビューする場合，後世に映像も伝えるのは意味が大きいかと思われる。通常のインタビューの場合は，写真が何枚かあればよいであろう。

アメリカの多くの大学や研究所でオーラル・ヒストリー・プロジェクトが行われ，図書館の資料室などに保管されているテープがあるが，稀に古いものでほとんど聞き取りが不可能な場合がある。録音が不適当だったのに加え，長年の保存で音質が低下したとのことである。内容が重要な場合で，トランスクリプトとして文字起こししてないインタビューだと，大変残念である。折角の貴重な情報が使えないのは無念である。最上の録音状態を確保できるよう，慎重に機器を選定すべきである。どんな機器を使うにしろ，当日失敗がないよう，事前に十分使い方に慣れておくことが重要である。

III. インタビューにあたって

インタビュー当日に必要なものは，テープレコーダー・テープ・マイク・電池（予備も十分に）・延長コード（電源につなぐ場合）・個人情報ファイルと対比年表・質問リスト・筆記用具などである。どこで行うにしろ，被面談者がゆったりとした気持ちで話をできることを主眼にし，座る場所・位置などを決めていく。本人の希望と，録音環境としての条件を絡ま

せながら，最良の場所を選ぶ。第三者はなるべく入れず，一対一でインタビューするのが望ましい。できるだけ，聞き手と話し手の両者が向き合って座れるようにし，テープレコーダーを録音に最適なように設定する。両者の距離は近いながらも適度に空け，話しやすい雰囲気にする。

まずテープの頭に，被面談験者と面談者自身の名前，インタビューの場所・日時などを吹き込む。例えば，「これは__年__月__日，[場所] にて [インタビュアーの氏名] による [被面接者の氏名] さんとのインタビューです。」といった，基本的な情報を手短に吹き込む。万一，ラベルがはがれた時など，いつ誰とのインタビューであったかが判らなくならないよう，必ずいれる。また，この部分を巻き戻し再生して，録音が正しく為されているかを，インタビュー開始前にチェックするとよい。

インタビューを始めてからは，できる限り中断をせず，話を続ける方が望ましい。そのためにも，電話などの邪魔がはいらないような場所にしておくのが重要となる。また，インタビューの途中で，いわゆる「オフレコ」―テープレコーダーを止めた状態でなら話す―というのは極力避ける方が望ましい。事後の訂正も可能なので，テープ・レコーダーは付けたままがよい。

1度に1時間半位で，長くても2時間を越えない程度にする。出来るだけ被面談者に話す機会を与える。被面談者が自分のことばで，自分の目から見た歴史証言をするのを，インタビュアーは補助しているという立場を念頭におかなげればならない。すなわち，二者対談ではなく，被験に過去を語ってもらうのであるから，インタビュアーは聞き手役である。そのためには，聞き手は質問を簡潔でわかり易く，かつ1度に1つの質問におさえる。被面談者からの話を聞き出すのが目的なので，「はい」「いいえ」で終わる質問ではなく，「どうして～だったのですか」「どのように～したのですか」といった，説明を要するような質問の仕方にする。話しているときに，次の質問をしたりせず，最後まで終わらせる。質問の意図からずれていたりしても，中断はせず，区切りがついた時点で早めに方向修正をする。また，沈黙が続くと当惑するかもしれないが，被面談者が質問への答えを考えたり，当時の様子を思い出そうとしている場合もあるので，無理に場をもたせようと何でも話そうとするのはかえってよくない[15]。

メモを取り，不明な点は後で尋ねる。漠然とした表現や，身振り手振りを使っての説明は，録音テープから情報がつたわらないので，そのつどインタビューの中で確認するとよい。例えば，手を使って「これ位の長さの...」といって説明されたら，「それは何センチ位だったんですか。」と尋ね，言葉にしてもらう。また，インタビューの中で，計画をたてたときには予想もしていなかったような情報が述べられたなら，機転を利かせた質問を付け加えたりして，適切にフォローする。

上記のような配慮をしながら，インタビューをさせる。あまり長くなりすぎないよう，適度のところでまとめ，もし聞き足りない部分があれば，再度インタビューをお願いしておく。どちらにしろ，被面接者に礼を述べ，インタビューを終了する。インタビュー終了後すぐに，テープとそのケースに必要事項（被面談者名，インタビュアー名，日時，場所，インタビューの長さなど）を間違いなく記入する。消去防止のため，カセットテープ爪を除去する。

IV. インタビューの後で

このように無事インタビューを終えた後は，録音テープの保管・管理，文字おこし（transcription），研究での使用，そして版権等の問題がある。歴史資料として保存・活用していくために，録音されたインタビューは大切に扱われなければならない。

貴重なインタビューが手違いで紛失したり消去されないよう，まずコピーを作成する。マスターテープは安全なところに保管し，音質を低下させないような環境で保存する。多数のインタビューを行った場合などは，番号・記号をつけたりして整理し，インデックスをつくる。主なトピックや質問を書き出したものも一緒に保管すると，後で内容を調べやすい。文字に起こさない場合は，テープをすべて聞かなくても必要な部分を見つけられるよう，説明文をつけておくと役立つ。文字に起こすのは手間と時間がかかるが，オーラル・ヒストリーを手がけた研究者自身と，その他の研究者にとっても，一次資料の文献の様に使えるので便利である。

アメリカでは，版権等に関して法的な問題が起こらないよう，同意書などを取り交わすことを，オーラル・ヒストリー・プロジェクトの一部としている。家系史は別として，折角話してもらった情報を公開できないのでは意味がないし，本人の許可なしに第三者へ公開したことで訴訟問題になるのも困る。日本では人々の権利意識がアメリカほどではないし，訴訟に持ち込む度合いも少ないといえるが，学問的に行うからには，トラブルを未然に防ぐよう配慮する必要がある。legal agreement とか release form とよばれるが，日本では「同意書」として，インタビューのテープ・トランスクリプトに関する権利を放棄し，教育・研究の目的に使用することに同意する，といった内容の文書に署名・捺印してもらうのがよいであろう。この点に関しては，日本の法律関係者の意見をきき，日本の状況にあわせた具体的なフォーマットを作成するのが望まれる。

V. まとめ

口述史は，正確さにおいての批判はあるにしても，オーディオ技術の発達・普及と高等教育の広がりなどの要因だけを考えても，その土壌は十分耕されているといえる。ただ，自己流のインフォーマルなインタビューや客観性・史実への忠実性などを考えずに行われたインタビューは，史料としての価値が損なわれる可能性がある。是非とも，OHA などが試行錯誤して辿り着いた方法論を参考に，日本での基盤を築き，これから発展させていくことが望まれる。研究方法としてだけでなく，その民主的な性格からも，学生主体の教育方法として薦められるであろう。学生が自ら問題意識をもち，質問を考え，文献調査をやり，その上で自らが被面談者とのインタビューを行うことにより，能動的に学べるというのは大きな利点である。アメリカでは，教育課程と地域社会の結ぶ接点をつくる方法として，中等教育から高等教育レベルで巾広く活用されており，学生の勉学意欲に効果的だと評価されている[16]。大学レベルでも授業へ導入し役立てているケースが多くみられる[17]。これを考えると，受動的な授業に慣れ，自ら考え行動することが少ないといわれる日本の学生には，オーラル・ヒ

ストリーが目新しい刺激になるのではないだろうか。

本家本元のアメリカにおいてでさえ，オーラル・ヒストリーは「tool (道具) 以上だが discipline (学問分野) 以下」といわれることがあるが，裏を返せば，その重要性は広く認識され，多岐の領域で使用されているゆえでもあろう。日本ではまず tool として，オーラル・ヒストリーの確固たる地盤を固めるのが課題だといえる。正当な歴史研究手法として研究者・学生がともにその地位を築いていくことが望まれる。

注

1）David K. Dunaway, "The Interdisciplinarity of Oral History." in David K. Dunaway and Willa K. Baum, eds., *Oral History: An Interdisciplinary Anthology*, 2nd ed. (Walnut Creek, Calif.: Altamira Press, 1996), p. 7.

2）Louis Starr, "Oral History," *Encyclopedia of Library and Information Sciences*, vol. 20 (New York : Marces Dekker, 1977), reprinted in Dunaway and Baum, eds., *Oral History*, p. 54.

3）Starr, "Oral History," p. 43.

4）Dunaway, "Interdisciplinarity," p. 8. しかし，ネヴィン自身は，オーラル・ヒストリーを彼が設立したというのは神話であり，実際は自然にそうなったのだ（"It founded itself."）と述べている。Allan Nevins, "Oral History : How and Why It Was Born," 同上書，p. 33.

5）Bruce Catton, "History-Making Idea," *Think* (Mar-Apr. 1965).

6）詳細は Lynwood Montell, "Preface to *The Saga of Coe Ridge*," reprinted in Dunaway and Baum, eds., *Oral History*, pp. 176-178 参照。

7）スターは，その爆発的成長の理由は，完全には説明できないと述べている。Starr, "Oral History," p. 45.

8）Starr, "Oral History," p. 48.

9）Oral History Association, *Directory*, pp. 4-5. これによれば，他の国々でこのような組織化されたオーラル・ヒストリー学会があるところは，カナダ・イギリス・オーストラリア・ニュージーランド・ロシアなどである。

10）井村忠政「ある日系カナダ人女性の生活史―口述の記録と解説―」北海道学園大学学園論集 第 74 号（1992 年 12 月）123-137 頁；同 77 号（1993 年 9 月）35-55 頁；名古屋市立短期大学研究紀要　第 54 集（1994 年 11 月）1-24 頁；同 54 集（1995 年 3 月）61-83 頁；同 56 集（1996 年 3 月）35-53 頁。

11）Dunaway, "Interdisciplinarity," p. 10.

12）Oral History Project, *How To Do Oral History* (Honolulu: Oral History Project, Social Science Research Institute, University of Hawaii at Manoa, 1985), pp. 3, 5.

13）Oral History Project, *How To Do Oral History*, p. 5.

14）DeRoche, "I Learned Things Today That I Never Knew Before : Oral History At The Kitchen Table," *Oral History Review* 23 : 2 (Winter 1996) : 48.

15）これらは，オーラル・ヒストリー・インタビューの基本であるが，Oral History Project, *How To Do Oral History* がより詳細な要点を箇条書きにして著している。pp. 13-15 参照。

16）Dunaway, "Interdisciplinarity," p. 11.

17）Starr, "Oral History," pp. 52-53.

18）Starr, "Oral History," p. 52.